
魔法少女リリカルなのは～転生のガイアメモリ～

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生のガイアメモリ

【Nコード】

N5927N

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

現実世界で探偵をやっていた俺はある日突然事故で死んでしまった。その後、死んでしまった俺の前に神様が現れて、俺が死んだのは神様の間違いだから、違う世界に転生させて言うてきた。転生する世界は、リリカルなのはの世界？　おいおい、俺ストーリーあんまり知らねえぞ！

この物語はリリカルなのはの世界に転生させられてしまった主人公が自分の信念に従って生きていく物語である。

初めて小説を書くので下手なところもあるかもしれませんが、どう

かよろしくお願ひします。

プロローグ

「あれ、ここ何処だ？」俺は気が付いたらとても広くて真っ白な空間にただ一人ポツンと立っていた。いや、立っているというのは少しおかしい。何故ならば、地面がなく、下の方にも空間があるように感じられたからだ。

「お、落ち着け、俺。とりあえず自分のことをどれだけ覚えてるか確認してみよう。」

俺の名前は連条翔太。歳は24歳、独身。彼女は生まれて出来たことはない。職業は探偵で、俺が探偵になった理由はマンガや推理小説、テレビアニメを見て探偵に憧れたからだ。ついでに俺は少しオタクっぽいところがある。何故少しなのかというと、全て探偵に関係あるからだ。特に仮面ライダーWに一番ハマってしまったっている。特に決め台詞である「さあ、お前の罪を数えろ！」はかなり格好良く、俺も時々言うときがある。俺がこの台詞を言うときは、相手が悪いことをしているときや、既にしてしまった後でそれを反省していないときである。そして、俺がこの空間にくる前の行動を思い出してみると・・・え〜と、確か俺は連続結婚詐欺の被害者達に依頼されて、いろいろな人脈や情報を駆使してその詐欺野郎を見つけ警察に突き出した後、バイクで走っている時に十字路でいきなり横から大型トラックが突っ込んできてそこで意識がなくなっているって・・・

「俺完璧に死んでるじゃん！」と思わず叫ぶと、突然後ろから「そのとおりじゃ。」と言われた。その一言に驚いて後ろを振り向くと真っ白いローブを着て長くて白い髭を生やした俺よりでかい爺さんが1人いた。

「だ、誰だあんたは!？」俺が目の前の爺さんに尋ねると、その爺さんは「ワシはお主等人間でいう神様じゃ。」と言った。その台詞に俺は再び驚いてしまった。確かにそう言われてみると、この爺さ

んからは普通の人では感じられなかった力みたいなのがあるように感じられたからだ。「神様だと？確かに言われてみればそんな気もするが、その神様がいったい何のようで死んでいる俺の前に現れたんだ？」俺がそう尋ねると、神様は「すまなかった。」といきなり土下座してきたのでびっくりしてしまった。「ど、どうしたんだ？いきなり土下座して謝罪したりして？」俺がそう聞いてみると、「お主を間違えて死なせてしまったのじゃ。お主はまだ生きられるはずじゃったのに。」と言ってきた。

俺はかなりの衝撃を受けてしまった。だってそうだろ？自分はまだ生きられるはずだったのに間違えて殺してしまっただけで言われたんだぜ？だから俺は爺さんに聞いたんだ。「俺は生き返ることは出来ないのか？」って。そしたら、「お主がもといいた世界は無理じゃ。なんせ体がグシャグシャになってさらに火葬されてもつてのう、蘇生させることは不可能じゃ。」「そ、そんな．．ん、ちょっとまで元いた世界はつていうと．．．？」

「お主が生まれ育った世界は無理じゃが、別の世界なら生き返ることが出来るということじゃ。もっともこの場合生き返るというよりも転生するということじゃな。」「爺さんにそんなことを言われて、俺は少し聞きたいことが出来たので尋ねてみた。」「生き返れることは正直かなり嬉しい。しかし、その世界に危険なことは起きないのか？また、どのような世界に転生するんだ？」俺がそう聞いてみると、「はつきり言うとは危険なことはいかなりあるな。なんせアニメの世界じゃからな。知つとるか？魔法少女リリカルなのはというアニメを。」「少しだけ見たことがあるアニメだな。確か魔法がある世界で世界が滅びてしまうような危機が何度か起きてしまったような気がする。あと、デバイスとかいう魔法のアイテムを使っていたはずだ。俺は爺さんに向かって俺が知ってることを話すと、「だいたいそんなもんじゃな。あとお主はそれらの事件に必ず巻き込まれてしまふな。」

俺はそれを聞いて「おいおい、ちょっと待てよ！巻き込まれたら死

んじまうじゃねーか！俺には戦う方法なんか無いからな！」と爺さん
に詰め寄りながらまくしたてると、「わかつとる。じゃからお主
にはデバイスとそれに関係のある能力をそれぞれ1つずつやるから
の。」と爺さんはそんなことを言ってきた。俺はそれらのことを聞
いてみて驚いてしまった。何故なら、デバイスは俺が一番ハマって
いた仮面ライダーWのベルト三種類とそれらに関係のあるガイアメ
モリ全部をデバイスとして、さらに特典としてメモリガジェット全
種類をくれると言われてしまった。能力はファイリッポレスキルというらしいの星の本棚ら
しい。俺はそれを聞いて「それって大丈夫なのか？確かヤバイやつ
はロストロギアとかいうやつになって持っているだけで犯罪者にな
るんだろ？ガイアメモリってロストロギアにならないのか？」と尋
ねてみた。すると爺さんは「大丈夫じゃ！ガイアメモリ自体には世
界を滅ぼせるような力はないし、このガイアメモリには能力付加と
魔力を上げるという2つの力しかないわい。」俺はそれを聞いて一
安心して「わかった。それじゃそろそろ転生させてくれ。」爺さん
にそう言った。

すると爺さんは「よし、ならばゆくぞ！」そう言った次の瞬間！い
きなり俺の真下に穴が開き、俺はその穴の中に吸い込まれてしま
いそのまま意識を失ってしまった。

第1話

俺は自分に吹いてくる心地よい風の感触に目を覚ました。そこから見える景色はあたり一面見渡す限り何も無い荒野だった。

俺は驚いて叫ぼうとした。しかし、俺の口から出てきた声は「オギヤアアアアアア！！」（何処だここはアアアアア！！）「という赤ん坊のような声だった。

俺は自分の手を見てみた。そしたらその手はまるで赤ん坊のように小さく、可愛らしい手だった。俺はその手を見て初めて自分は赤ん坊だというのに気が付いた。それと同時に、自分に起きた出来事を思い出した。

俺は少し慌ててしまったが、すぐに落ち着いて現状確認をすることにした。何故すぐに落ち着けて現状確認が出来るのかというと、探偵をしているときに慌てたら危険なことが多かったので、なるべくすぐ落ち着くことが出来るように心がけていたからだ。

だけど、普通の探偵ならばこのようなことはあまり出来ないようだ。生前、同業者にたまたま会ったときにそのことを尋ねてみるとそう言われたからだ。ならば何故俺は出来るのかというと、俺は運が悪くて殺人事件や誘拐事件などの危険な事件に巻き込まれてしまうことが多く、そのたびに慌てていたら命の危険が何回もあったからだ。俺の運の悪さは仮面ライダー電王に出てきた野上良太郎と同じくらい悪いのだ。

そのため、なるべく慌てず、冷静に行動するということが知らず知らずのうち出来るようになってしまったのだ。

話しが逸れてしまったが、これのおかげで今自分の現状や近くの様子を確認することが出来るのでちょうど良かったような気がする。

今俺の体は赤ん坊のゆりかごの中で柔らかい布に包まれているっばいな。さらにゆりかごの中を見ると、このゆりかごの中には赤い宝石と左が緑、右が黒の二対の翼をかたどった腕輪みたいなのが

それぞれ1つずつ、手紙が一枚入っていた。俺はこの状況から（あれ？もしかして俺、捨て子？）という嫌な予想がしてきた。

それからしばらくして、人が近付いてくる気配がしてきたからその気配がする方向を見てみると、少し年とった爺さんが近付いてきた。その爺さんは俺に近づくと、「何故こんな所に赤ん坊が．．．？」と呟いていた。

爺さんはゆりかごの中に入っている手紙に気付き、それを読み始めた。俺はその間、「頼む爺さん！！俺を拾ってくれ！！」と年甲斐もなく願っていた。その願いが通じたのか、手紙を読み終わった爺さんは俺を抱き上げてこう言った。「お前はワシの部族で立派に育てよう。ワシの部族は子供を拾うことがよくあるからの。だからお前も元気に育つんじゃぞ。わかったかユーノ。」と。

俺はそれを聞いて（「ユーノ」って確かリリカルなのは脇役キャラだったような．．．）とあまり知らない原作知識を思い出そうとしてみた。しかし、リリカルなのはなんてあまり興味がなかったから知っていることなんか少ししかなかったから、これから先どうなるかなんて全然わからなかった。だけど、俺はそれで良いと思っただ。何故ならユーノというキャラと俺は似ているところなんかこれっぽっちもないだろうと思っただから。それに、俺は俺なんだから信念に従って生きていく生き方を変えることは出来そうにない。だったら自分らしくこの二度目の人生を生きていこうと爺さんに抱かれながら決意した。

第2話（前書き）

この話でユーノはついに変身します。どのライダーに変身するかは本編を読んでください。

第2話

- sideユーノ -

俺がスクライヤー族に拾われてから数年が経ち、俺は5歳になった。俺はこの時点でバインドや結界などの補助系魔法と飛行魔法は全部覚えて使えるように訓練した。しかし、攻撃系の魔法は1つも覚えることが出来なかった。だけど、俺専用デバイスであるライドドライバーをいつでも使えるように体が動けるようになった時から体力作りを始めて、今では大人顔負けの動きが出来るようになり、体付きも原作のユーノより良くなった。

- side out -

ある日、スクライヤー族はある世界で見つけた遺跡を調べるためにその遺跡の近くでキャンプをしていた。ユーノはその時、自分より3歳年上のリア・スクライヤと自分と同年のハルナ・スクライヤと一緒に大人たちについて行って遺跡の中で大人たちに混じって遺跡のことを調べていた。

ユーノ「こっちは何も見付からなかったな。リア姉さん、ハルナ、そっちの方はどうだった？」リア「ダメね、こっちにもないわ。ハルナの方はどう？」ハルナ「こっちは壁に少し怪しいところがあるから多分畏ね。」

ユーノ「そうか、だったらその怪しいところには触れないように注意しとくか。」リア・ハルナ「わかった。」「そう言ってリアとハルナが向かい合った瞬間！三人が立っている地面にいきなり魔法陣が発生した。ハルナ「な、何！？」リア「こ、これは転移魔法！？」ユーノ「しまった！壁のところはフェイク、偽物だ！」ユーノたちがそのことに気付いたときは既に遅く、転移魔法陣が発動し、ユーノたちはそこからいなくなってしまった。

- sideユーノ -

俺たちが畏にはまり、転移させられた場所は遺跡の奥にある隠し部屋らしく、出入口は何処にも見当たらなかった。俺は近くにいるリア姉さんとハルナに一ヶ所に集まって周りを警戒した。何故なら、さっきの罠はおそらく侵入者に対するトラップで、多くの場合、このトラップの類は侵入者を撃退する方法があるからだ。

すると突然、獣のうなり声のようなものが聞こえてきた。そのうなり声が聞こえた方向を見ると、そこにはまるでケルベロスのように首が3つある狼のようなモンスターがそこにいた。俺たちはすぐに気付いた。このモンスターは侵入者を殺すだけのために存在している。何故ならモンスターの周りには人骨がいくつか散らばっていたからだ。

リア姉さんとハルナはこのケルベロスもどきが放つ殺気に吞まれて腰が抜けてしまったようだ。そしてケルベロスもどきはそんな2人に対して飛び掛かってきた。リア・ハルナ「き、キャアアアアアアア!!!」しかし俺が2人が殺されるのを黙って見てるわけないだろ!俺「オリヤアアア!」俺は飛び掛かってきたケルベロスもどきにカウンターで回し蹴りを食らわせてぶっ飛ばした。

- side out -

リアとハルナは驚いていた。ユーノが怪物に恐れず迎撃したからだ。しかし、この攻撃で怪物はさらに強烈な殺気を放ち、彼女達はもう動くことが出来なくなってしまった。ユーノはそんな2人の様子に気付き、ユーノ「2人とも、離れている。」と言いながら一歩前に出た。リアとハルナはそんなユーノに驚いてこう言ってきた。リア「ダメよ、ユーノ!私のことは諦めてハルナだけでも連れて早く逃げなさい!!!」ハルナ「ユーノ!私よりお姉ちゃんを連れて逃げて!!!」そんな2人に対してユーノはこう言った。ユーノ「イヤだ!2人とも見捨てることは出来ない!だから俺がリア姉さんとハルナを守るんだ!!!」ユーノは男らしい顔でそう言った。その顔を見た

彼女達は顔を真っ赤に染めた。

- sideユーノ -

俺は右手首についているライドドライバーに目を向ける。これを使うのは初めてだが、彼女達を死なせるわけにはいかない！俺は叫ぶ！大切なものを守るために！「ライドドライバー、モード・ロスト、セットアップ！！」するとライドドライバーが喋り始めた。《OK、マスター！ロストモード、セットアップ！！》
そして次の瞬間！俺の魔力光である翡翠色の光があたり一面を染めた。
- side out -

その光の中でユーノはバリアジャケットを纏っていく。しかし、そのバリアジャケットは奇妙なものだった。首から下が真っ黒なライダースーツを着ていて、腰の部分にロストドライバーがついているという姿だった。

光が消えてそのバリアジャケットをリアとハルナの2人が見たとき、2人とも驚きと不安を隠せなかった。何故なら、そのバリアジャケットを纏ったユーノは初めて見たが、武器らしいものもなく防御が低そうに見えたからだ。しかしユーノはそんな彼女達を安心させるように笑顔を2人に一瞬向け、すぐに顔を引き締めてケルベロスもどきに向けた。するとケルベロスもどきは動きを止めて、うなり声を上げながらユーノをじつと睨み付けていた。ケルベロスもどきは気付いたのだ。ユーノに秘められた力のことを。

そんなケルベロスもどきを睨みながらユーノは右手をゆっくりと顔の横に上げた。するとその右手に黒い光が集まり、光が弾けるとそこには黒いUSBメモリみたいなものがあった。これは仮面ライダーWに出てきたガイアメモリの1つで、切り札の記憶が入っているジョーカーメモリである。ユーノはそのジョーカーメモリのスタートアップスイッチを押した。するとそのメモリから《JOKER！》という音声が発せられ、それと同時にユーノとそのメモリから

強烈な魔力が発生した。

ユーノはそのジョーカーメモリを右手で軽く上に投げて、落ちてきたそのメモリを左手で掴み、そのままロストドライバーにセット！それと同時に右手を開いた状態で上からスライドしながら自分の顔の前に固定した。そして叫んだ！

ユーノ「変身！！！」そして叫ぶと同時に左手でロストドライバーを開いた。するとまた《JOKER!》という音声が流れて、それと同時にまるで切り札を思わせるような音楽が流れ、ユーノの体を黒い粒子が集まりながらバリアジャケットの上から新たな姿を形成する。まず両足に爪先から膝まで黒いブーツに覆われ、次に両手の指先から肘まで黒い手甲に覆われた。次にロストドライバーの上から首の下までに黒い鎧に覆われた。その鎧は仮面ライダージョーカーの胸の部分にソックリだった。最後にユーノの両目の色が翡翠から黒に変わっていった。

- sideユーノ -

俺は仮面ライダージョーカーを元にしたバリアジャケットと騎士甲冑を合わせて2で割ったようなアーマージャケット（俺命名）を身にまとい、ケルベロスもどきにあのセリフを言った。

「さあ、お前の罪を数える！」そして俺はケルベロスもどきに突っ込んだ。

- side out -

変身したユーノとケルベロスもどきの戦いはユーノが終始圧倒していた。ケルベロスもどきはユーノを殺そうと噛み付きや引っ掻き、さらには3つの口から魔力で出来た針をいくつも出してきた。しかしユーノは噛み付きは避け、引っ掻きはチョップで爪を折り、針は回し蹴りで全部相手に跳ね返した。さらにユーノは相手に近付いて左右の拳に魔力を込めて連打を叩き込み、さらに両足にも魔力を込めて連続で蹴りを食らわせた。ユーノの攻撃でケルベロスもどきはもうフラフラになっていた。

ユーノ「これで止めだ！」ユーノはそう言ってロストドライバーからジョーカーメモリを抜き、右腰にあるスロットに差し込みそのスロットを叩いた！すると《JOKER MAXIMUMDRIVE！》という音声が流れ、魔力が高まり始めた。このスロットはマキシマムスロットといい、ここにガイアメモリを差し込むことでその差し込んだガイアメモリの力を最大限に高めて、必殺の一撃を放つことが出来るのだ。そして今からユーノが放つ一撃は数多くの仮面ライダーが受け継いできた必殺技！！その名も！ユーノ「ライダーキック！！」ユーノはそう技の名前を叫びながらケルベロスもどきに凄まじい魔力がこもった右足で飛び蹴りを打ち込んだ！するとケルベロスもどきはかなり吹っ飛び、そのまま爆発してしまっただけ。その爆発が収まると、そこにはケルベロスもどきの姿は何処にもなく、爆発が起こった場所には3つの宝石らしきものが残っていた。

- sideユーノ -

その後、俺たち3人はケルベロスもどきを倒したときに出来た壁の穴から脱出し、俺たちを探しにきた大人たちに見つけてもらい、遺蹟から出ることが出来た。後の調査でわかったことだが、この遺蹟はもともと魔法生物を改造したり、異なる生物どうしを合成させたりしていわゆる生物兵器を作っていたらしかった。あのケルベロスもどきは、もしも研究資料を盗みにきた侵入者を殺す為だけに作られたものだったそう。ま、リア姉さんとハルナを助けることが出来てよかったと思う。

- side out -

- sideリア -

あの時、私はもうダメだと思いユーノにハルナのことを頼み、自分が犠牲になろうとしたわ。だけど、ユーノはそれを拒み、私が見たこともないデバイスを使ってあの怪物を倒しちゃった。ユーノが戦う姿やその時の凛々しい顔を見て、私はわかったわ。ユーノのこと

を弟としてではなく、1人の男として好きなんだって！だけど、それと同時にライバルが出来たことにも気がついたわ。多分妹のハルナもユーノのことが好きになったに違いないわ。だってユーノのほうをチラチラ見ながらそのたびに顔を赤らめているんですもの。だけど例えハルナといえどもユーノは渡さないわ！だって初恋なんだから！

- side out -

- side ハルナ -

わ、私つたらいつたいたいどうしちゃったのかしら！？ユーノをまともに見ることが出来ないわ！ユーノを見るたびに顔が赤くなるのが自分でもわかっちゃうわ！も、もしかしてこれって恋！？わ、私ユーノのことが好きになっちゃったの！？だ、だったらやることはただ1つしかないわ！ユーノと恋人同士になるしかないわ！たとえどんなことが起きようともユーノを諦めないわ！

- side out -

しかし、ユーノはこの2人が自分のことを好きになっっているとは思わず、（2人ともいつたいたいどうしちゃったんだろう？）とそんなことを考えていた。

第2話（後書き）

次回はユートの設定を更新しようと思っています。

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。

主人公設定

前世の名前・・・連条翔太

享年・・・24歳・独身

前世の職業・・・私立探偵

好きなもの・こと・・・笑顔、コーヒー（砂糖控えめ・ミルクはなし）、武術の訓練、読書、自分を育ててくれたスクライヤー族の人々、風、探偵が入っているもの全部（特に仮面ライダーWが一番のお気に入りです。その決めゼリフをよく言うほど）

嫌いなもの・こと・・・涙、人を傷つける人、自分以外はどんなつてもかまわないという人、命をどうでもいいと考える人、自分の大切なものを奪おうとする人、人の気持ちや大切なことをバカにする人、探偵をバカにする人

備考・・・バイクを運転中に事故で死んでしまった私立探偵の青年しかし、その死は神様が間違えてしまったことだった。そして神様は主人公をリリカルなのはの世界に転生させてくれることにしてくれた。

しかし主人公は、リリカルなのはをほんの少ししかしらず、しかも戦う力がないので死んでしまうと神様に叫んだ。

すると神様は仮面ライダーのベルト三種類になるデバイスとそれに関係あるガイアメモリとメモリガジェット、能力として星の本棚をつけてくれた。

そして転生したが、その転生した体はリリカルなのはのキャラクターであるユーノ・スクライヤの体だった。しかし主人公はそんなこととは関係なく生きていくことを決意した。

ちなみに主人公は超がつくほど鈍感であり、生前、自分に好意をもっている女性や熱烈なファンクラブがいることにまったく気がついていなかった。この鈍感さユーノに転生した後も治らなかつた。

ユーノの今の実力・・・生前覚えて今も鍛え続けている武術全部、飛行魔法、結界魔法、防衛魔法、回復魔法などの補助系魔法。攻撃魔法は原作同様使えない。

レアスキル
希少能力・・・星の本棚（仮面ライダーWのフィリップの星の本棚とほぼ同じ能力で、違うのは地球だけでなく、他の次元世界と繋がっていることである）

デバイス・・・クロスドライバー（種類はインテリジェンスデバイス、声は女性）備考・・・
主人公が神様からもらったデバイスで、セットアップする時は「クロスドライバー、モード〇〇〇！セットアップ！」と行うことで〇〇〇とついた仮面ライダーWに出てきたドライバーを装着したバリアジャケットを纏う。

さらに、そのドライバーにあつたガイアメモリをセットすることでそのガイアメモリで変身することが出来る仮面ライダーを模したアイマージャケットを纏うことができる。

しかし、今このデバイスにはリミッターが掛かっており、現時点ではロスドライバーしかセットアップ出来ない。
ちなみにリミッターの数は2つで、解けると下のようになる。

リミッター2つ ロスドライバーしか使えない。変身出来るライダーはジョーカーとスカル。

リミッター1つ アクセルドライバーが使えるようになる。しかし、ダブルドライバーはまだ使えない。変身出来るライダーはアクセルが加わる。

リミッターなし すべてのドライバーが使えるようになる。変身出来るライダーはWが加わる。

しかし、ガイアメモリはファンゲメモリとトライアルメモリ、エクスoriumメモリの3つはついてなく、そのメモリを使ったフォームに変身することが出来ない。

3つの宝石・・・2話でユーノが倒したケルベロスもどきの爆発跡から見つけた宝石。それぞれ白・青・銀と色が違っていて、3つとも違う力を秘めていることはわかったが、どのような力を秘めているのかはわからない。

主人公設定（後書き）

今は変身出来ないフォームもいつかは本編に出る予定です。どういう風に出るかはネタバレになるので秘密です。ちなみに幼なじみのオリキャラ姉妹の設定はA・S編で出そうと考えてます。次はかなり飛んで原作開始直前の話になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5927n/>

魔法少女リリカルなのは～転生のガイアメモリ～

2011年10月7日02時06分発行